

# パルミラ語碑文研究 1

## － 予備作業 －

酒 井 龍 一

### 本稿の目的

本稿は、パルミラ語碑文研究に着手する予備作業として、先ずパルミラ遺跡・パルミラ語・アラム語群・セム語一般等に関する手短かな文献を概観し、次に碑文文字編年の作業方針を提示することに目的がある。

### パルミラ遺跡

シリア砂漠の中央に位置するパルミラ遺跡は、紀元前1～後3世紀にかけてのシルクロードの有名な隊商都市である（W.Wright 1895・1987『Palmyra and Zenobia』；小玉新次郎 1980年『パルミラ―隊商都市―』；同1994年『隊商都市パルミラの研究』；I.Browning 1979『Palmyra』；M.Tlass 1986『Zénobie Reine de Palmyre』；A.Bounni and K.Al-As 'ad 1988『Palmyra』；（財）島根県並河萬里写真財団1996『季刊文化遺産 創刊号 隊商都市パルミラ』）。同遺跡では、個人顕彰・墓建造・墓室譲渡・彫像人名・祈願・感謝・関税等、様々な碑文（J.-B.Chabot 1922『Choix d'Inscriptions de Palmyre』；1930-1975『Inventaire des Inscription de Palmyre I～XII』；1926『Corpus Inscriptionum Semiticarum, II』-；D.Hillers and E.Cussini 1996『Palmyrene Aramaic Texts』）が現存あるいは出土する。パルミラの内実を解明するには、遺跡の発掘調査に加えて碑文解読も不可欠な作業である。

### パルミラの社会状況

パルミラが繁栄した前1～後3世紀は、いわゆるローマ帝国の時代にあたる。各地の碑文に依拠しながら、パルミラを中心とする中近東の社会状況を紹介したのはミラーである（F.Miller 1993『The Roman Near East 31BC-AD337』）。ローマ帝国の中近東への進出動向と、デュラ=ユーロポス・パルミラ・アパーミヤ・ビブロス・ペトラ等、各地の主な都市遺跡との関係を具体的に解説している。その内容の豊富さは別に、アラム語等の英訳や、ローマ帝国の政治・軍事・職階等に関するギリシャ語・ラテン語とアラム語・英語との対照

関係を把握する場合や、各地の主な碑文を検索する場合にも便利である。巻末の11枚の地図には、中近東における主要遺跡の所在地・地形・交通路を明示している。

なを、中近東全体の古代遺跡に関する基本文献として、例えば J.Hassaon chief ed. 1988『Civilization of the Ancient Near East I～IV』がある。それは言語関係に関しても、セム語一般の解説(J.Huehnergard「Semitic Languages」)を初め、各所に関係項目を的確に解説している。

#### シルクロードのパルミラ

パルミラの隊商都市として存在意義が急増した紀元前後のシルクロードを、相馬隆が積極的に復元している(1982年『絹の道を西にたどる—安息隊商歷程考』。同書は、ギリシア人のイソドルス(Isidorus)による『パルティア駅停誌』に準拠しながら、「先ず Arachosia の Alexandropolis より、シリアの Antiochia までを主要幹線路として考察し、ついでそれに伴う諸種の重要な枝脈ともいうべき分派する路程については、各論としてこれを考察する心算」で執筆したもの。第9～13章に、パルミラや中近東の諸遺跡に関し極めて実証的に考察している。文章中に、ハトラやパルミラ等のアラム語碑文を筆写・紹介していることは、碑文研究の立場からも参考となる。

なを、巻末に前512年から後460年までの詳細な年表を付けている。次の高階(1982年)による歴史年表と合わせて大いに参考となる。

#### パルミラの歴史年表

アラム語研究者の高階美行が、様々な文献からの確に情報を収集し、パルミラを中心とする中近東の歴史年表(前18世紀～後687年)を作成している(1982年「イスラム以前のアラブ関係歴史年表」(『大阪外国語大学学報58』)。同書は、パルミラの成立から消滅に至る経過を、ナバタイ等を含む周辺地域の動向と照らして理解するには極めて便利である。パルミラ(タドモル)自体に関し、前1110年の「Assyria のTiglath-Pileser I、西征して Aramaeans との戦いで Tadmur を破る」から、後634年の「Khalid b.al-Walid 将軍の包囲の後、Tadmur イスラムに屈する」までの事件を克明に年表化している。パルミラの個々の事件に関しては、小玉新次郎『隊商都市パルミラの研究』(1994年)が最も詳細に解説している。

#### パルミラ語の初解説

パルミラ語の初解説は、1754年に J.-J.Barthélemy (1754「Réflexions sur l'alphabet et sur la Langue dont on se Servait Autrefois à Palmyre」『Memoires de l'Académie des Inscriptions et Belles Lettres 26』)と、J.Swinton (1754「An

Explication of all the Inscriptions in the Palmyrene Language and Character hitherto Published』『Philosophical Transactions of the Royal Society of London 48-2』が実現した（小玉1994年－前出）。240年以上も前のことである。パルミラ語とギリシャ語の二ヶ国語碑文の存在が、解読に有効であった。

パルミラ語を含む諸語の初解読の一覧は次の文献にある（P.Daniels 1996「Methods of Decipherment」『The World's Writing Systems』；「Shewing of Hard Sentences and Dissolving of Doubts ; The First Decipherment」『Journal of the American Oriental Society 108』）。Barthélemy は、パルミラ語との関係が深いフェニキア語を1764年に、同じく帝国アラム語を1768年に解読の成功させたという。

### パルミラ語の文法書

1935年に本格的な文法書が刊行された（J.Cantineau 1935・1987『Grammaire du Palmyrénien Épigraphique』）。同書では、パルミラ語の文章・単語はフランス語で解説され、パルミラ文字はヘブライ文字に翻字されている。両文字の形状は近似するので、対照表は必要ない。以降、新たな文法書は刊行されず、今日でも同書は重要な役割を担っている。ただし、パルミラ語の単語集は付載されず、以降もパルミラ語辞典の刊行はない。

従って、発掘で新たな碑文が出土し未知の新単語が含まれる場合、各自で有効な文献を掌握・入手し、解読の根拠とする必要がある（例えば Hoftijzer, Jongeling and Brill 1995－後出）。文法に関しては、聖書関係のアラム語の文法書（W.Stevenson 1924・1991『Grammar of Palestinian Jewish Aramaic』）等で補えばよい。アラム語全般の解説書（K.Beyer 1986『The Aramaic Language』 translated by J.Healey）もあるが未見である。

### 今日の碑文研究

碑文研究は J.-B.Chabot（1922『Choix d'Inscriptions de Palmyre』）の碑文集刊行によって特に活発になった。以来70年余、J.Cantineau、H.Ingholt、J.Starcky、H.Seyrig、A.Bounni 他が様々な研究を重ねてきた。今日の第一人者は、M.Gawlikowski（1973『Palmyre VI Le Temple Palmyrénien』；1974『Recueil d'Inscriptions Palmyréniennes』）と J.Teixdor（1979『The Pantheon of Palmyra』）である。

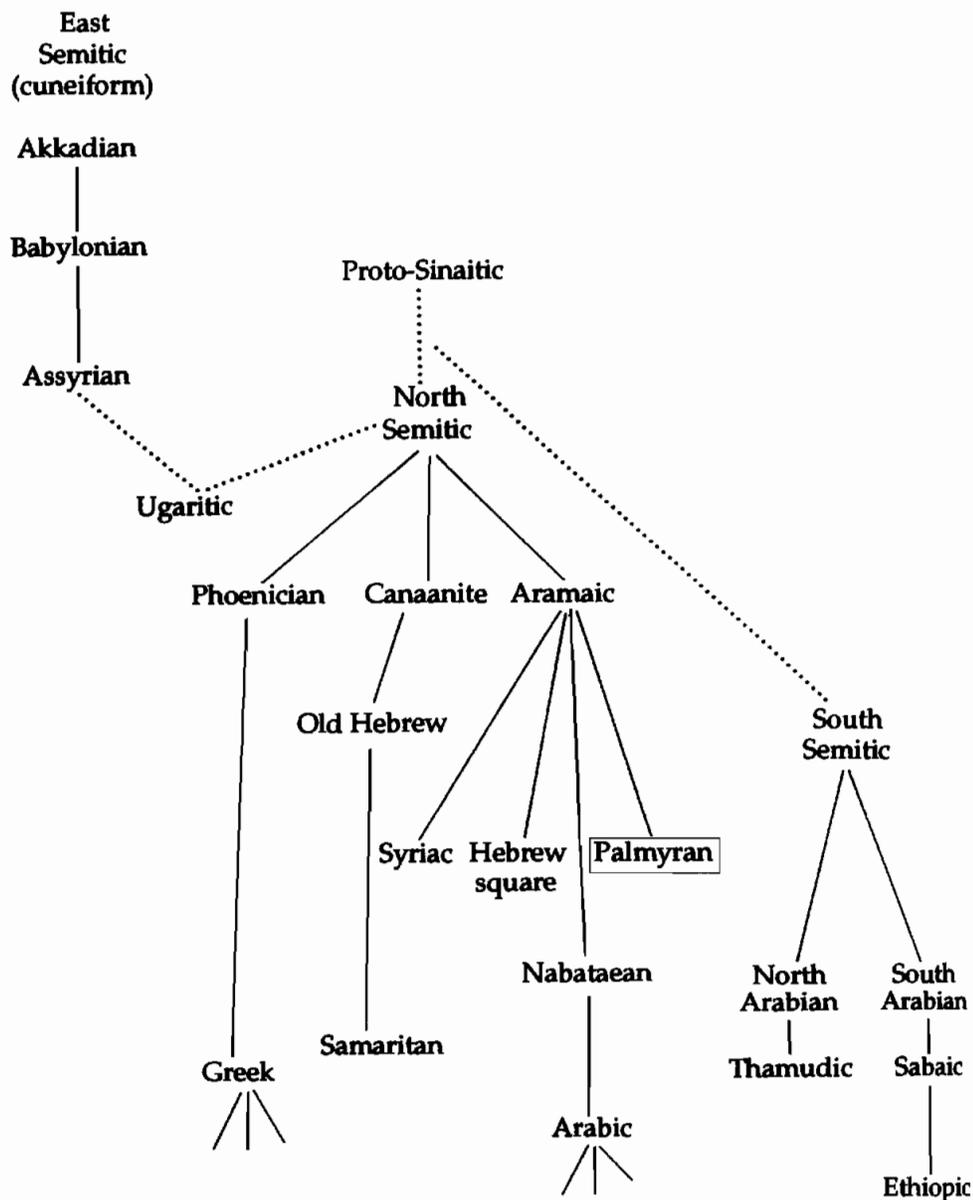
一方、私は、1991年から奈良・シリアパルミラ遺跡学術調査団員として同遺跡の発掘に参加（1996年「パルミラ碑文を読む」『季刊 文化遺産 創刊号』）。この時点から初めてパルミラ碑文の解読作業に着手し始めた（R.Sakai 1994「Eight Palmyrene Inscriptions Found in the Southeast Necropolis」『Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria』）。その解読例を紹介しておく（第1図）。



年「パルミラにおけるローマ化の問題」『季刊文化遺産 創刊号』)。1971年以降に新たな碑文も多々出土し、この人名辞典の増補作業も不可欠である。

### 言語一般の基本文献

古代言語一般に関する基本文献は多々ある（亀井孝・河野六郎・千野栄一編1988年『言語学大辞典 第1巻』；Coulmas 1996『Encyclopedia of Writing Systems』；Daniels



第2図 パルミラ語の位置 (出典 F.Coulmas 1996)

and Bright eds. 1996『The World's Writing Systems』; アンドレ・マルティネ編1972年『近代言語学体系-2 世界の言語』; J. デュボワ他1973年『ラールス言語学用語辞典』; 世界の文字研究会1993年『世界の文字の図典』; 矢島文夫1995年『人間と文字』(表紙はパルミラ彫像の写真)。中近東周辺の古言語に焦点を当てた解説書 (British Museum 1990『Reading the Past—Ancient Writing from Cuneiform to the Alphabet』) がある。最近、各章分冊で日本語訳 (パルミラ語の解説は、ジョン・ヒーリー-1996年『初期アルファベット』(学芸書林) も刊行されている。

### セム語系統のパルミラ語 (第2図)

パルミラ語はセム語系統に位置する。セム語には、シュメール語の楔形文字を使うアッカド語の東系と、原シナイ文字系譜のアルファベットを使う西系がある。西系は更に、南西セム語系と北西セム語系に分かれる。南西系にはアラビア語群と南アラビア語群が、北西系にはカナン語群とアラム語群がある。パルミラ語は北西セム語系に位置する。

カナン語群にはウガリット語・フェニキア語・古ヘブライ語等が、アラム語群には古典アラム語・各種刻文語 (ジンジリリ刻文他)・ナバタイ語・パルミラ語・マンダ語・バビロニアタルムード・古典シリア語が含まれる (矢島1985年)。カナン語群とアラム語群の諸語は、構造・文法・単語・文字・アルファベット等、言語的特徴を概ね共有するので、パルミラ語研究には両群諸語の学習も必要となる。北西セム語に関する辞書 (Hoftijzer, Jongeling and Brill 1995『Dictionary of the North-West Semitic Inscriptions』) は、前1000年～後300年頃の単語を綿密に収録している。

### シュメール語と楔形文字

セム語の源流のアッカド語は非セム語であるシュメール語の楔形文字を用いる。シュメール語自体は後のアラム語やパルミラ語に脈絡はないが、アッカド語の学習にはシュメール語の学習も不可欠となる。その文法書 (M.Thomsen 1984・1991『The Sumerian Language』) は楔形文字をアルファベットに翻字しており、実際の粘土板等との照合には別にシュメール文字の一覧表 (例えば下記の R.Labat 1995) が必要となる。シュメール語自体に関する日本語での解説は、飯島紀1996年『シュメール人の言語・文化・生活』・1997年『シュメールを求めて』・1997年『シュメール語を読む』等にみられる。

### セム語としてのアッカド語

楔形文字を使うアッカド語は、アルファベットを使うアラム語やパルミラ語へと系譜する (アッカド語「rabu≒偉大な」・アラム語「rb≒偉大な」・パルミラ語「rb'≒偉大な人・長・

長官)。アッカド語は、古期アッカド語・バビロニア語・アッシリア語の三方言に区分される (C.Walker 1990「Cuneiform」『Reading the Past』)。アッカド語解読の基本マニュアル (R.Labat 1948・1995『Manuel d'Épigraphie Akkadienne』) は、シュメール語とアッカド語の文字一覧表・文字対照表・字形変遷表・辞典・単語集等を完備している。

楔形文字は手書きが通例だが、楔形文字をコンピューターやワープロ入力する方法は、次の文献に解説がある (H.Nissen, P.Damerow and R.Kenglund 1993『Archaic Bookkeeping』1993; 小林義尚 1987年「ワープロによるシュメロ・アッカド楔形文字作成およびその運用の成果と問題点」『オリエンタ30-1』)。

#### ウガリット語とアルファベット

シリアの地中海沿岸のラス・シャムラ (都市遺跡のウガリット) から、前14～13世紀の粘土版文書が多数出土している (柴山栄1978年「ウガリット文書近接への視点」『オリエンタ21-1』)。ここでは楔形文字による30の表音文字が使用 (アルファベット一覧表が出土) され、その数と配列はアルファベットの北セム語系諸語と概ね共通する。当然ながら、アラム語やヘブライ語等と共通する単語も極めて多い。その位置づけは不確定だが、「カナン・アラム両語派分岐以前の前二千年紀の北西セム語とする説もあるが、大勢は北カナン語説をとる」(松田1988年) という。こうした問題については津村俊夫の論文 (1976年「ヘブル語語彙研究に対するウガリット学の貢献について」『文藝言語研究 (言語篇)』) がある。ウガリット語の文法書 (S.Segert 1984『A Basic Grammar of the Ugaritic Language』) では主要テキストの検索も可能であり、巻末に簡単な単語集が付いている。

#### フェニキア語とフェニキア文字

前10世紀以前に出現したアラム語は、前18世紀頃に出現した原シナイ (原カナン) 文字に由来するフェニキア文字を使用した。フェニキア語は、前13世紀頃から、地中海東側沿岸に点在するビブロス・ティロス・シドン等の港湾都市を主体とし、地中海沿岸の広範囲で使用された。文法書 (Z.Harris 1936・1990『A Grammar of the Phoenician Language』) では、フェニキア文字をヘブライ文字に翻字している。パルミラ語を含むアラム語群やフェニキア語を含むカナン語群は、ヘブライ文字に翻字が可能である。

フェニキア文字の地域性と変遷に関する研究 (J.Peckham 1968『The Development of the Late Phoenician Scripts』) は、キプロス・ビブロス・ティロス・シドン等の、前8～2世紀頃の文字集成をしている。アラム語の文字変遷との比較や、パルミラ文字の出現経過を掌握するに重要なデータとなる。フェニキアの政治・植民・交易等の概説書には、例えば M.Aubet 1994『The Phoenicians and the West』等がある。

## アラム語と諸区分

パルミラ語はアラム語群 (K.Beyer 1986『The Aramaic Language』 translated by J. Healey—未見) の一つである。アラム語は時代的に、古代アラム語 (前10～8世紀)、帝国・公用・標準アラム語 (前7～3世紀頃)、中期アラム語 (前2～後3世紀頃)、後期アラム語 (後3～13世紀)、現代アラム語 (13世紀～現在) に区分される (高階美行1985年「アラム語の世界」『アフロアジアの民族と文化』)。

アラム語の文献目録 (J.Fitzmyer and S.Kaufman 1992『An Aramaic Bibliography—part 1』1992) は、第1巻を「Old Aramaic (BC.900—700) ・Standard or Official Aramaic (BC.700—200) and Biblical Aramaic」とし、第2巻を「Middle Period of Aramaic (BC.200—AD.300)」に区分する。聖書アラム語とは、『旧約聖書』における「ダニエル書」や「エズラ記」等のアラム語部分を指す。

## アラム語のパルミラ方言

パルミラ語は、帝国アラム語から各種方言へ分裂が生じた以降、中期アラム語の一方言 (パルミラ方言) である。パルミラ語は、「碑文においては3人称女性複数完了形を男性形で代用する点や正書法に、帝国アラム語の特徴が残っている」ことから、「前2世紀に帝国アラムから変化した東アラム語のパルミラ方言」と評価し、以下の諸点が帝国アラム語の言語的特徴とみる (松田1988年—前出)。

- a 代名詞や動詞活用における3人称女性複数形の男性形による代用
- b 3人称複数動詞の目的格代名詞が接尾形でなく自立形であること
- c 派生動詞の不定形がm-をとらぬこと
- d 属格関係が連語ではなく関係詞 dy で表わされること
- e 語順の相対的自由さ

ただし今日まで遺存するパルミラ語はすべて、墓碑・顕彰碑・祭碑・関税碑等に極く限定されたもので、文学・手紙・行政文書・神話・日記・学術書等、現実感溢れるものは皆無である。最も長文の碑文は、いわゆる「関税碑文」(小玉 1994年—前出 ロシア・エルミタージュ美術館蔵) である。

## 古アラム語とセフィレ碑文 (第3図)

「前700年頃までのアラム語を古アラム語と呼ぶ」(松田1988—前出)。その代表は、前

	Mésa c. 840	Kilamu fin du IX's.	Zakir	Hadad début du VIII's.	Sfiré milieu du VIII's.	Karatepe 2'moitié du VIII's.	Panamu c.730	Barrékud fin du VIII's.
א	𐤀	𐤁	𐤂	𐤃	𐤄	𐤅𐤆	𐤇	𐤈
ב	𐤉	𐤊	𐤋	𐤌	𐤍	𐤎	𐤏	𐤐
ג	𐤑	𐤒	𐤓	𐤔	𐤕	𐤖	𐤗	𐤘
ד	𐤙	𐤚	𐤛	𐤜	𐤝	𐤞	𐤟	𐤠
ה	𐤡	𐤢	𐤣	𐤤	𐤥	𐤦	𐤧	𐤨
ו	𐤩	𐤪	𐤫	𐤬	𐤭	𐤮	𐤯	𐤰
ז	𐤱	𐤲	𐤳	𐤴	𐤵	𐤶	𐤷	𐤸
ח	𐤹	𐤺	𐤻	𐤼	𐤽	𐾀	𐾁	𐾂
ט	𐾃	𐾄	𐾅	𐾆	𐾇	𐾈	𐾉	𐾊
י	𐾋	𐾌	𐾍	𐾎	𐾏	𐾐	𐾑	𐾒
כ	𐾓	𐾔	𐾕	𐾖	𐾗	𐾘	𐾙	𐾚
ל	𐾛	𐾜	𐾝	𐾞	𐾟	𐾠	𐾡	𐾢
מ	𐾣	𐾤	𐾥	𐾦	𐾧	𐾨	𐾩	𐾪
נ	𐾫	𐾬	𐾭	𐾮	𐾯	𐾰	𐾱	𐾲
ס	𐾳	𐾴	𐾵	𐾶	𐾷	𐾸	𐾹	𐾺
ע	𐾻	𐾼	𐾽	𐾾	𐾿	𐿀	𐿁	𐿂
פ	𐿃	𐿄	𐿅	𐿆	𐿇	𐿈𐿈	𐿉	𐿊
צ	𐿋	𐿌	𐿍	𐿎	𐿏	𐿐	𐿑	𐿒
ק	𐿓	𐿔	𐿕	𐿖	𐿗	𐿘	𐿙	𐿚
ר	𐿛	𐿜	𐿝	𐿞	𐿟	𐿠	𐿡	𐿢
ש	𐿣	𐿤	𐿥	𐿦	𐿧	𐿨	𐿩	𐿪
ת	𐿬	𐿭	𐿮	𐿯	𐿰	𐿱	𐿲	𐿳

第3図 フェニキア・ヘブライ・アラム文字 (出典 M.Dupont-Sommer 1958)

750年頃のシリア・セフィレ碑文である (A.Dupont-Sommer and J.Starczyk 1958 『Le Inscriptions Araméennes de Sfiré』 ; A.Lemaire et J.-M.Durand 1984 『Les Inscriptions Araméennes des Sfiré et l'Assyrie de Shamshi-Ilû』)。最も長文 (約110行) で内容も豊富 (二国間条約) である。巻末に単語集が付く。日本でも同碑文の解読は活発で、伴康哉 1967年「セフィレ碑石のアラム語」『西南アジア研究 18号』や、守屋彰夫 1982年「セフィレ碑文における神々の機能」『オリエント 25-2』等の論文がある。この碑文に関し、伴は、「当時はまだ方言への分裂は起こっていなかったから、いちじるしい特異性が見られないのは当然のことといえよう」と評価する。

### 帝国アラム語とエレファンティネ文書

帝国アラム語は「広大な地域の中で驚くほど均一な言語状態が保たれている」(高階1985年-前出) ことが特徴である。その代表はエジプト・ナイル川のエレファンティネ島で出土した前5世紀の各種のパピルス文書 (E.Cowley 1923・1967 『Aramaic Papyri of the Fifth Century B.C.』) がある。エジプトはアラム語圏から離れているが、エルサレムのユダヤ人が移住し、様々なアラム語文書を残した。古アラム語や帝国アラム語は石碑や粘土版等で、刻文として依存することが多いが、筆書のパピルス文書には様々な問題に関して現実感豊かな表現を見ることができる。その字体も草書体的な様相が強い。既にフェニキア文字とは様相をかなり異にする。

### 中期アラム語とナバタイ語

中期アラム語は、「ヘレニズム世界にあって独自の文明を維持したユダヤ、北西アラビア、パルミラ、バビロニア、パルティアでは、ベルシャ時代の帝国アラム語を規範とし・・・、次第に各地方独自の文字アラム語が形成されていった」(松田1988年-前出) ことが基本的な特徴である。例えば、パルミラ語にやや先行する、ヨルダン～北アラビアのナバタイ語がある。ヨルダンの都市遺跡ペトラや、北アラビアの墓地遺跡マダーイン・サリフ (ヘジャーラ) が有名である。後者では、後1世紀代の38碑文の詳細な解読報告がある (J.Healey 1993 『The Nabataean Tomb Inscriptions of Mada'in Salih』)。中期アラム語の独自性は、言語自体より独特な文字に表現されている。ヘブライ角文字に近いパルミラ文字と違って、ナバタイ文字はいわば草書体である。同時代でも様相は大いに異なる。ナバタイ文字はアラビア文字へと系譜することになる。

### シリア語との関係

パルミラ語と後のシリア語との関係は極めて深い (J.Healey 1990 『The Early Alphabet』)

ー前出)。後2世紀頃にキリスト教が流布するにつれ、聖書がアラム語のシリア方言で翻訳され始めてシリア語が出現したという。即ち、シリア語⇔アラム語と評価できる。従って、意味不明のパルミラ語単語に遭遇した場合等、シリア語の単語に関する情報が有効となる。シリア語の研究は進んでおり、本格的な辞典とし J.Smith 1903・1979『A Compendious Syriac Dictionary』がある。シリア文字にはセルトー・エストランゲロ・ネストリウス等の書体があるが、ヘブライ角文字に近いパルミラ文字と違って、芸術的に流麗なシリア文字に馴染むのには時間を必要とする。

#### 『旧約聖書』のアラム語 (第4回)

例えば、The British and Foreign Bible Society 1991『The Holy Scriptures of the Old Testament』は、ヘブライ文字による旧約聖書で、英語の対訳がある。旧約聖書は、基本的には、ヘブライ語・ヘブライ文字で書かれているが、「創世記31：47」の2語、「エレミヤ書10：11」、「エズラ記4：8－6：18、7：12－16」、「ダニエル書2：4－7：28」（キリスト教新聞社1971年『新聖書大辞典』）はアラム語・ヘブライ文字で書かれている。初心者の方には、ヘブライ語部分とアラム語部分は一見では区別し難い。例えば、アラム語では関係詞「DY⇔～の・～するところの」を非常に多用するが、ヘブライ語にはそうした単語はみられない。名詞の複数形の末字は、アラム語が「-」であるに対して、ヘブライ語は「-M」である。こうした部分を見れば、両言語部分の区別が簡単にできる。

旧約聖書のアラム語に関して、日本語文献では『旧約聖書ヘブル語大辞典』（名尾耕作1982年）に「アラム語辞典」が掲載されている。旧約聖書中のアラム語には発音記号が記されており、大いに有効である。

#### パレスチナのアラム語文法書

パレスチナのアラム語に関する文法書は(W.Stevenson 1924・1991『Grammar of Palestinian Jewish Aramaic』)がある。同書は、タルグム（アラム語の翻訳書）や、パレスチナのタルグムとミッドラッシム（後4～16世紀に書かれた聖書に関する伝説や伝承等の注解等）のアラム語部分や、また新約聖書のアラム語的要素等を学ぶ学生のために刊行されたものである。各種方言を比較しながら解説されている。もちろん、『旧約聖書』の「ダニエル書」や「エズラ記」のアラム語部分を読む場合にも参考となる。カンテノーによるパルミラ語の文法書を補う存在でもある。

#### ヘブライ語との関係

アラム語とヘブライ語の関係は強い。『旧約聖書』のヘブライ語辞典には、先に紹介した

כ לְאֵלֶּה שְׁמֵיָא: עָנָה דְנִיָּאל וְאָמַר לְהוּא שְׁמָה דִּיאֱלֹהָא  
 מְבָרַךְ מִדְּעֵלְמָא וְעַד־עֵלְמָא דִּי חֲכֻמָּתָא וּגְבוּרָתָא דִּי  
 21 לָּהּ הוּא: וְהוּא מְהַשְׁנֵא עֲדִינְיָא וְזִמְנֵיָא מְהַעֲדָה מַלְכִין  
 וּמְדַבְּרִים מַלְכִין יִהְיֶה חֲכֻמָּתָא לְחַכְיִמִין וּמְגִדְעָא לְיֹדְעֵי  
 22 בִּינָה: הוּא נְלָא עֲמִיקָתָא וּמְסַתְרָתָא יְדַע מַה בְּחֻשׁוֹכָא  
 23 וּגְהוּרָא עִמָּה שְׂרָא: לָךְ אֵלֶּה אֲבָהֵתִי מְהוּדָא וּמְשֻׁבָּח  
 אָנָּה דִּי חֲכֻמָּתָא וּגְבוּרָתָא יִתְבַּת לִי וּכְעַן הוֹדַעְתָּנִי דִּי  
 24 בְּעִנְיָא מְנִיךְ דִּי־מַלְכָּת מַלְכָּא הוֹדַעְתָּנָא: כָּל־קָבֵל דִּנְהָ  
 דְנִיָּאל עַל־עַל־אַרְיֹודֵי דִי מִנֵּי מַלְכָּא לְהוּבְרָא לְחַכְיִמִין בְּבַל  
 אֹוּל וּבִן אֲמַר־לָהּ לְחַכְיִמִין בְּבַל אֲלֵי־תְהוּבְרָא הָעֵלְנִי  
 כה קְדָם מַלְכָּא וּפְשָׂרָא לְמַלְכָּא אַחְוָא: אַדִּין אַרְיֹוד  
 בְּהַתְּבַהֲלָהּ הִגְעַל לְדִנְיָאל קְדָם מַלְכָּא וּבִן אֲמַר־לָהּ דִּי  
 הַשְׁפַּחַת גְּבַר מִדְּבַנֵּי גְלוּתָא דִּי יְהוּדֵי דִּי פְשָׂרָא לְמַלְכָּא  
 26 יְהוּדַע: עָנָה מַלְכָּא וְאָמַר לְדִנְיָאל דִּי שְׁמָה בְּלִמְשָׂאֲצָר  
 27 הָאִיתִיךְ כְּהוּל לְהוֹדַעְתָּנִי חֲלָמָא דִּי־חַוִּיּוּת וּפְשָׂרָה: עָנָה  
 דְנִיָּאל קְדָם מַלְכָּא וְאָמַר רְנָא דִּי־מַלְכָּא שְׂאֵל לָא  
 חַכְיִמִין אֲשַׁפִּין חֲרַטְמִין גְּרוּזִין יִכְלִין לְהַחְוִיָּה לְמַלְכָּא:  
 28 כְּרָם אִיתִי אֵלֶּה בְּשֵׁמֵיָא גְלָה רֹוּחַ וְהוֹדַע לְמַלְכָּא  
 נְבוּכַדְנֶצַּר מַה דִּי לְהוּא בְּאַחֲרִית יוֹמֵיָא חֲלָמְךָ וְחֻוּגֵי  
 29 רְאִשְׁךָ עַל־מְשַׁכְּבְּךָ דִּנְהָ הוּא: אַנְתָּה מַלְכָּא  
 רְעִיּוֹנִיךְ עַל־מְשַׁכְּבְּךָ סִלְכִין מַה דִּי לְהוּא אַחֲרֵי דִנְהָ וְנִלָּא  
 ל רְנָא הוֹדַעְךָ מְהַדִּי לְהוּא: וְאַנְהָ לָא בְּחֻכְמָה דִּי־אִיתִי  
 בִּי מִדְּכַל־חַיָּיָא רְנָא דִּנְהָ גְלִי לִי לְחֹן עַל־דְּבַרְתָּ דִּי  
 פְשָׂרָא לְמַלְכָּא יְהוּדַעִין וְרְעִיּוֹנֵי לְבַבְךָ תִּגְדַּע:  
 31 אַנְתָּה מַלְכָּא חֻוּהָ הַיּוּת וְאֵלוֹי צְלָם חַד שְׂנִיָּא צְלָמָא דְכִין  
 32 רַב חֻוּהָ יִתִּיר קָאִם לְקַבְלְךָ וְרַחֵם דְחִיל: הוּא צְלָמָא

ראשה

22. v. וְהוּא קִי 24. v. כִּיָּא כָּל 26. v. יְהוּדֵי 29. v. יְהוּדֵי

ibid. יְהוּדֵי 31. v. יְהוּדֵי

名尾耕作の『旧約聖書 ヘブル語大辞典』(1982年)があり、巻末にアラム語辞典が付く。パルミラ語研究の観点では、ブラウン他の辞書(F.Brown・S.Driver and C.Briggs 1951『Hebrew and English Lexicon of the Old Testament』)が推奨できる。各語の解説中に、様々な碑文等から収録されたパルミラ語を含むアラム語の単語が紹介されている。末尾には聖書アラム語辞典が付く。聖書ヘブライ語の簡単な文法書には(R.Harrison 1993『Biblical Hebrew』1993)等がある。ヘブライ語自体の歴史を知るには、アッカド語以来の言語的な流れを概観した文献(A.Saenz-Badillos 1993『A History of the Hebrew Language』)があり、巻末の文献目録も詳細である。

なを、ヘブライ大学のユダヤ史研究者のシャムエル・サフライは、『イエス時代の背景』(1992年)中の第Ⅱ部で、「イエス時代に話されていた言語」・「イエス時代に書かれていた言語」という論文で、イスラエルの当時におけるアラム語の実情を紹介している。本文と原註によって、更に当地の実情に接近することが可能であろう。

### 現在アラムの研究

高階美行は、「現代アラム語は、セム語族北西セム語派に属するアラム語の現代語である。前10世紀まで遡る古代アラム語から約三千年間中近東で主要な役割を果たしてきた言語における方言群の総称」と定義する。その言語学的な解説は次の論文に詳しい(1985年「現代アラム語概観(一) 現代東アラム語」『大阪外国語大学学報71-1・2・3』;同1986年「現代アラム語概観(二) 現代中部アラム語・現代マダガ語・現代西アラム語」『同学報72-1』)。

上記のように、現代アラム語は、東アラム語・中部アラム語・西アラム語・マダガ語方言という四大グループに大別される。アルメニアやグルジア地方における現代アラム語(現代アッシリア語)の解説書がある(佐藤信夫・飯島紀1993年『アッシリア語(現代アラム語)入門』)。なお、現代アラム語が実際に話されているシリアのマルーラ村では、例えば、『**الارامية المحكية**』(1992)と題する解説書を入手することができる。

### パルミラ文字の系譜

パルミラ文字の数は22字で、書字方向は右→左である。語末形(ソフィート)は「ヌン」のみに用いられる。概ね同時代の『死海文書』(ヘブライ文字)の字体と類似する。パルミラ文字は、いわゆる「アルファベット」の系統に位置する(J.Healey 1990-前出)。前17世紀頃の原シナイ文字は前10世紀頃にフェニキア文字となり、古アラム語はフェニキア文字を借用する。以降、時代と共にフェニキア文字⇨アラム文字の変形が進行し、最終的に前2～1世紀頃のパルミラ文字の出現当時の字形に至る。その過程では「ある程度ヘブライ文字の影響を受けている」(伴1981年-後出)と評価される。

前8～6世紀時点の古アラム文字（例えばセフィレ・ハダッド・キウムラ碑文）は、古式のフェニキア文字（例えばアヒラム石棺碑文）に直接的な系譜を引く（Dupont-Sommer 1958－前出）。パルミラ文字は、フェニキア文字と古アラム文字の時間的・空間的変異形である。直前、即ち前3～2世紀の地中海東岸の新フェニキア文字（Peckham 1968－前出）と比べると、相当に独自化が進行している。

#### フェニキア文字からシリア文字まで（第5図）

アルファベットの歴史は J.Naveh (1987『Early History of the Alphabet』) が詳説している。また、既に小辻節三 (S.Kotsuji 1937『The Origin and Evolution of the Semitic Alphabets』) が70年以上も前に変遷表を発表している。

伴康哉は「古代アラム文字からパルミラ文字まで」（1981年『世界の言語 第5巻 世界の文字』）と題し、フェニキア文字・古代南アラビア文字・古代アラム文字・エレファンティネ文書文字・ティマ文字・古代ヘブライ文字（外典創世記）・パルミラ文字・シリア文字の3書体・ナバタイ文字・ネマールナのナバタイ文字等を紹介している。

様々な文字を紹介する基本文献をいくつか提示しておく（カーロイ・フェルデシ＝パップ 1988年『文字の起源』；ジョルジュ・ジャン 1990年『文字の歴史』；世界の文字研究会 1993年『世界の文字の図典』；矢島文夫 1995年『人間と文字』；H.Jensen 1970『Sign, Symbol and Script』；British Museum 1993『Reading the Past』；F.Coulmas 1996『Encyclopedia of Writing Systems』）；P.Daniels and W.Bright 1996『The World's Writing Systems』）。

#### 編年に関する現状認識

これまでパルミラ遺跡から出土した年代の明らかな碑文は、最古のものが前44年、対する最新のものが後274年である（小玉1980年－前出）。時間幅は3世紀強。パルミラ碑文は通例、セレウコス暦で表記される。同暦は前312年10月から始まるので、碑文の年号から311年から312年を引算して西暦に換算することができる。

今日、パルミラ文字の編年研究はどの程度まで進行しているのか。小玉は次のように認識している。

「これらの碑文に書かれているパルミラ文字は、二世紀の終わりごろから草書体が目立ってくる。それはパルミラの発展にともなってパルミラ人が文字にも華やかな装飾的効果をねらったものと思われるが、そのおかげで文字が時代とともに変化する過程が研究され、碑文の年代が三十年ほどの

誤差で明らかにできるようになった」。

今日では、年号が記されていない碑文や年号部分が欠損している碑文でも、その文字形によって「30年程度の誤差」で年代が特定できるという。言い換えると、概ね「各世紀・3区分」で特定できることになる。その前提には、3世紀間の時間幅に対し「10期」程度の編年表が存在することを示唆する。その可能性は、例えばルーブル美術館が刊行した『Palmyre』(1993)と題する最新の展示図録でも、年代明記のない各碑文に対し、Teixidorらが、以下のような各世紀毎の三期区分法を採用していることから頷ける。ただし各世紀の境目は、「～世紀末」・「～世紀初頭」と区別されず、「～世紀と～世紀の境目前後」と一括されるのが通例である。

「Première moitié du I<sup>e</sup> siècle après J.-C.」

「Seconde moitié du II<sup>e</sup> siècle après J.-C.」

「Fin du II<sup>e</sup> ou début du III<sup>e</sup> siècle après J.-C.」

### 字体の分類名称

この問題に関しては、M.Gawlikowskiの文献（1974『Recueil d'Inscriptions Palmyreniennes』）から解説を抜き出しておく。この分類名称は今日でも活用されている。

Il m'a paru nécessaire d'indiquer pour chaque inscription le type de l'écriture. Puisque l'étude de la paléographie palmyrénienne reste encore à faire, malgré la mise au point de J. Cantineau qui date de 1935 et les contributions plus récentes, on n'a adopté que les distinctions les plus évidentes; nos notices retiennent les types suivants : *archaïque* (seconde moitié du I<sup>er</sup> siècle a. C.), *arrondi* (au I<sup>er</sup> siècle p. C., mais parfois plus tard), *classique* (déjà brisé; surtout au II<sup>e</sup> siècle) et *maniéré* (tardif), ainsi que la *cursive* et *semi-cursive*. Les lettres sont parfois tracées ou reprises à la peinture rouge; ces cas sont signalés. Quand l'inscription accompagne un relief, le style de celui-ci est précisé dans la mesure du possible; là non plus, les critères de datation ne sont pas très sûrs. J'ai donc adopté le classement commode de H. Ingholt, établi pour les bustes funéraires : 1<sup>re</sup> catégorie recouvrant *grosso modo* le I<sup>er</sup> siècle p. C. et la première moitié du second; 2<sup>e</sup> catégorie : la seconde moitié du II<sup>e</sup> siècle; 3<sup>e</sup> catégorie : le III<sup>e</sup> siècle. Il va sans dire que ces dates n'ont rien d'absolu et ne serviront que de repères chronologiques.



$$11. \text{ } \psi - \gamma - \begin{cases} \psi - \gamma - \gamma - \gamma - \gamma - \gamma \\ \dots - \gamma \end{cases}$$

$$12. \text{ } \zeta - \zeta - \begin{cases} \zeta - \zeta - \zeta \\ \zeta - \begin{cases} \zeta - \zeta - \zeta \\ \zeta - \zeta \end{cases} \end{cases}$$

$$13. \text{ } \xi, \xi - \xi - \eta - \begin{cases} \eta - \eta \\ \eta - \eta - \begin{cases} (\eta) - \eta - \eta \\ \eta - \eta - \eta \\ \eta - \eta - \eta \\ \eta - \eta - \eta \end{cases} \end{cases}$$

$$14. \text{ } \zeta - \zeta - \begin{cases} \zeta - \zeta - \zeta - \zeta \\ \zeta - \zeta - \zeta - \zeta - \zeta - \zeta \\ \zeta - \zeta - \begin{cases} \zeta - \zeta \\ \zeta - \zeta \end{cases} \end{cases}$$

$$15. \text{ } \xi - \xi - \xi - \xi - \begin{cases} (\xi) - \xi - \xi - \xi \\ \xi - \xi - \xi - \xi \end{cases}$$

$$16. \text{ } \omicron - \omicron - \omicron - \omicron - \omicron - \omicron - \begin{cases} \omicron \\ \omicron - \begin{cases} \omicron - \omicron - \omicron \\ \omicron - \omicron \end{cases} \end{cases}$$

$$17. \text{ } \gamma - \gamma - \gamma - \begin{cases} \gamma - \gamma - \gamma \\ \gamma - \gamma - \gamma \\ \gamma - \gamma - \gamma \end{cases}$$

$$18. \text{ } \rho - \rho - \begin{cases} \rho - \begin{cases} \rho \\ \rho \end{cases} \\ \rho - (\rho) - \rho \\ \rho - \rho - \rho - \rho \end{cases}$$

$$19. \text{ } \varphi - \begin{cases} \varphi, \varphi, \varphi - \varphi - \varphi - \varphi \\ \varphi \end{cases} - \begin{cases} \varphi - \varphi \\ \varphi - \varphi = \varphi \\ \dots - \varphi \end{cases}$$

$$20. \text{ } \gamma - \gamma - \gamma - \gamma - \gamma - \gamma - \begin{cases} \gamma - \gamma - \gamma \\ \gamma - \gamma \end{cases}$$

$$21. \text{ } \omega - \omega - \omega - \begin{cases} \omega - \omega - \omega - \omega \\ \omega, \omega - \omega \end{cases}$$

$$22. \text{ } \chi - \chi - \chi - \begin{cases} \chi \\ \chi - \begin{cases} \chi - \chi - \chi - \chi - \chi - \chi \\ \chi - \begin{cases} \chi - \chi - \chi - \chi \end{cases} \end{cases} \end{cases}$$

## パルミラ文字編年表の有無

では、実際の編年表はあるのか。手元の論文や報告書を概観する限り見当らない。むしろ、年号が明記される碑文数例を手書き文字で並べ置き、読者がよく見れば、時代の特徴を若干は把握できる程度のものが通例である。だが、それらは暗黙に文字形の変遷を示唆するとしても、正確には考古学的な編年表とは言い難い。

そもそも各碑文研究者は、年号が明記された様々な碑文の観察を積み重ねており、経験的に特定能力を具備している。従って、文字型式を設定し個々に型式名を付け、また他の研究者一般が利用可能な編年表を提示せずとも、個々の頭中に暗黙の編年表を保持すればよしというのが実情である。30年程度の誤差で特定ができるという小玉の認識が、彼らの経験的能力のことを言っているのか、実際に編年表として公表された論文指しているのかの明記はない。私自身も捜査を続ける必要がある（補記参照）。

## 型式編年表の作成手順

考古学における一般的な編年表の作成は、以下のような手順をとる。土器や石器等、通例の考古資料と異なって、実際に暦年が刻まれることが多い碑文は、編年表作成の根拠には圧倒的に恵まれている。

- (1) 何かの根拠で各文字の形状を可視的に「分類」する。
- (2) それぞれに「型式名」を付ける。
- (3) 形の類似性によるセリエーションにより各文字「系列」を確定する。
- (4) 何らかの根拠（主に暦年）で各型式に「年代」を与える。
- (5) 個々の「型式変遷」を把握する。
- (6) 各型式の組合せによる「組成率」の変化を把握する。
- (7) 全体を総合した「編年枠組」を完成する。

## パルミラ文字（レーシュ）の時代的大別

パルミラ文字形の変遷を大別する時、「R（レーシュ）の識別点」の有無がチェックポイントの一つとなることは広く知られている。「古代アラム語からパルミラ文字まで」を著した伴康哉（1981年-前出）によれば、「西暦後2世紀中頃」が目安という。

「パルミラ文字は・・・互いに字形の類似したものが多い。KとB、MとQがその例であり、DとRはもはや区別できなくなり、2世紀の中頃からは徐々にR文字の上に識別点を加えられるようになった」。



- ① 322
- 336
- 371
- 375
- 378
- 405
- 420
- 420
- 421
- 440
- 458
- 500
- 534
- 551
- 553
- 569
- ①⑦ 575

(セレウコス暦)



第6図 ユッドの字形変遷概略 (出典 酒井 1995)

## パルミラ文字（ユッド）の時代的細別（第6図）

パルミラ文字形の変遷を細別する時、22文字の中で、「ユッド」の形状が最も重要なチェックポイントとなる。即ちユッドが、全文字の中で字形の時間的変化が最も急激なのである。そこで、セレウコス暦322年から同576年、即ち250年間余の字形変化をざっと提示しておこう（酒井龍一1995年「パルミラ碑文における「ユッド」の変遷」『セム語碑文研究』）。

それによると、当初は「頂点が鋭く尖り、直線的な両辺は長さが同じで、下向き」の字形から、途中の「頂点は尖るが丸味を帯び、左辺より右辺が長くなり、右に傾斜する」字形を経て、最終的に「全体が全くの半円形で、完全に横向き」の字形へと、刻々と変化する事実が確認できる。そのマイクロ変化を把握しておく、年号なき碑文でも、確かに「30年程度の誤差」で年代が特定できる可能性を示唆する。私見では、全文字に関して資料整備した場合、ユッドは「10年程度の誤差」（目標は数年単位）だが、他の文字は変化がやや緩慢なので、「30年程度の誤差」で年代が特定できるものと予察している。

## 補 記

本文中に提示した文献は、私が手短かに概観し多くは入手したものである。しかし、実見していない古文書や未入手の文献もある。更に、今回は提示できていない基本文献（特にドイツ語文献やフランス語文献等）も極めて多い。御容赦を願いたい。それら基本文献は、時間をかけて順次、入手に努めていく。

今日、パルミラ文字の考古学的研究は、オランダの A.Klugist（1996「The Importance of the Palmyrene Script for Our Knowledge of the Development of the Late Aramaic Script」『Arameans, Aramaic and the Aramaic Literary Tradition』）が最も熱心である。

## 謝辞

私にパルミラ遺跡の発掘に参加する機会を与えて下さった樋口隆康・シルクロード学研究中心長、泉拓良・同僚かつ奈良県シリアパルミラ遺跡学術調査団隊長、友人かつ西藤清秀・同副隊長、またパルミラ語の学習を心から支援して下さい下さった小玉新次郎・元関西学院大学教授、そして現地でのパルミラ語碑文を丁寧に御教示して下さい下さったハレド＝アル・アサッド・パルミラ博物館館長の学恩に対し、文末ながら深く感謝の意を表します。